

## 〈曲目解説〉

16曲を数えるシュトラウスのオペレッタの中でも傑作と言われる「こうもり」は、短絡的に  
なりがちなオペレッタの中であって、十分に芸術的・思惑的作品として位置づけられている。  
それは全幕を通じる旋律の統一性が作品全体を支配していて、筋のみに耳を傾けさせないから  
である。構成の統一感、序曲の中にも必然的に表われている。全幕の旨味のある部分の羅列  
である接続風序曲（ポ・プーリ）ではあるが勝れた作品であるのは、シュトラウスのなせる業  
であろう。序曲には2つの特徴がある。1つは幾度にもわたるテンポの変化でありこれと共に  
曲想も転化する。ポ・プーリであることの証であるが、実に巧であり後につづくオペレッタへ  
の食前酒のようである。もう1つは、序曲には珍しく重唱のテーマを2度にもおよんで盛り込  
んでいる点である。またシュトラウスの独特のワルツやポルカをふんだんに組み入れてあり、  
序曲のみの単独の演奏が多いのも曲としての完成度の高さ由であろう。

モーツァルトの交響曲「パリ」は1778年に作曲された。ザルツブルグから巣立ったモーツァ  
ルトが就職の為にヨーロッパ諸国を点々とした際のパリ滞在中に書いたものである。パリ公演  
では大喝采を浴びたものの、劇場支配人ル・グロの勧めでアンダンテの部分をフランス趣味に  
書き換え再演している。今日残っているものは後者のものである。「パリ」にはモーツァルトの  
進境著しい処が窺える。もちろん就職運動中であり、好作品をあえて書こうとしたであろうが  
これはパリの先居地マンハイムに因がある。当時マンハイムは後のバイエルン選帝侯となるプ  
ファルツ選帝侯の居地として宮廷があり、優れた音楽を育てていた。世に言うマンハイム楽派  
である。この宮廷楽団はクラリネットを編入させ正規の二管編成をとっており、「パリ」は「ハ  
フナー」を除いて後期の作品群にもない二管編成という大編成となっている。またフランス趣  
味も手伝って彼の作品中特異な存在となっている。モーツァルトは苦勞知らずの天才として世  
に知られ、天分を欲しいままに発揮した作曲家である。が、実生活にあっては正反対の境遇に  
あった。

これとは立場を逆にする天才がメンデルスゾーンである。裕福な家庭に育ち地位と名譽に恵  
まれた彼の作品は底抜けに明るい。人間に対する懐疑心が全くない。当然彼も天分の面ではモ  
ーツァルトに次いで苦勞知らずの天才ではあった。

「イタリア」は文字通りイタリアをイメージして作られたものであるが、標題音楽的側面は第  
4楽章のサルタレロとタランテラの部分に停められている。サルタレロとタランテラはローマ  
とイタリアの民衆舞曲である。が、これも原曲を引いたものではなくてメンデルスゾーンの創  
作によるものである。第1楽章は、イタリアの紺青の風に着想している。第2楽章は、「巡礼た  
ちの行進」とも呼ばれる抒情的旋律よりなっている。が宗教的色合は感じられず、ナポリの夜  
の恋人たちの逢引きと言った方がよいだろう。第3楽章は、古典的形式からするとメヌエット  
になる訳だが、ここでは自由なスケルツォとでも聞くことのできる楽章になっている。管楽器  
群のオーケストレーションにメンデルスゾーンならではの色彩感の豊さがわかるだろう。第4  
楽章は、2種の舞曲よりなっているわけだが、サルタレロの方は快活であるが上品であり、タ  
ランテラの方は激しく愉快なものである。舞曲的要素の為にリズム感のはっきりした「のりの  
いい」曲である。ローマの謝肉祭の光景から着想したと思われ、祭に我を忘れるイタリア人気  
質の中に彼の歓楽を表出している。この頃の彼の書簡に「イタリア」は今まで最も成熟した  
ものであり、特に終楽章は満足のいく出来であるという記載が読める。しかし彼は死ぬまでこ  
の曲の出版を控え、しかも幾度にも改訂を加えている。彼にとってはそれだけに完全なものに  
仕上げたかったのだろうか。それとも不出来なあまりに可愛い子であったのだろうか。

（藤井部 勉）